

## 書評:大西仁・吉原直樹監修、李善姫・中村文子・菱山宏輔編 『移動の時代を生きる一人・権力・コミュニティ』

東北大学大学院博士課程後期 坪田光平

グローバル化が進行する現代社会において、人間形成を取り巻く諸条件がどのような変動を遂げているのか。そこに、送り出し／受け入れ社会がどのように関係し、既存の社会構造がどのような揺さぶりを経験しているのか。本書は、「移動」という軸を手掛かりとして、こうした問いに複数領域の研究者がアプローチする形を採っている。個々の章においても、「移動」によって浮き彫りになる人間形成とその諸条件への関心——「移動」による社会的不平等や格差を生むメカニズムにまで射程は広がる——が終始一貫していることがわかり、本書の目論見である「異分野間の学術的対話」(V頁)の契機としては、興味深い一冊となっている。とくに、グローバリゼーションの内実を〈人・権力・コミュニティ〉の次元から問い直すことにより、グローバリゼーションがもたらす様々な影響を、ミクロ・マクロの視点から相補的／立体的に捉えることを可能にしているという印象を受ける。事実、本書で扱われる内容は、特定学問分野に立脚したものではなく、実に多岐にわたっている点が特徴である。先に本書の目次を参照してみると、そこには「グローバル化時代の仲介型結婚移民——東北農村の結婚移民女性たちにおけるトランスナショナル・アイデンティティ(1章)」、「移民の子どもの教育に関する一考察——なぜ日本に住む移民の子どもの教育達成は困難なのか(2章)」、「日本留学は学生の『人間開発』に寄与するか——留学生の選択プロセス(3章)」、「高技能労働者の国際移動(4章)」、「地域的な人権ガバナンスの一考察——国際人身売買の問題を中心に(5章)」、「難民政策の二重性——難民認定制度と申請者の不安全化(6章)」、「ゲートを超えるバリ島のゲーテッド・コミュニティ(7章)」と続く。興味深いのは、本書が明瞭な対比をもって構成されている点にある。たとえば「移動」による経済的ないし人的資本形成のあり方

を問うために、3章では「留学生」に着目する一方、そうした移動がもたらす国家成長の問題として「頭脳流出」に警鐘を鳴らす4章が位置している。同様に、グローバリゼーションのもたらす「人身売買」としての移動に対し、国際犯罪としてその撲滅を問う5章がある一方、「人身売買」としての争点をもつ仲介型結婚移民女性を事例に、受け入れ社会がいかにか否定的なまなざしを向けているかを浮き彫りにする1章というように、その構成には目を見張るものがある。その意味で、本書は、各々の章が独立して纏められたものとしてではなく、相互一体のものとして読了されるべき性質をもっているといえるだろう。

ここで、本書が「マイノリティと教育」という問題関心を軸に選定されている以上、紙幅を割いて扱うべき章として、評者は、とくに2章「移民の子どもの教育達成」(永吉希久子・中室牧子著)を扱うことにしたい。もっとも、本書がもつ相補的／立体的な性質に鑑みれば、単独でこの章を取り上げて書評とすることは、かえって本書のもつ論点の広がりを見失いかねないようにも思う。というのは、マイノリティと教育という立論に、2章はこれまで稀であった議論として、〈マイノリティ間の教育達成の比較〉という研究領域の開拓に努めようとしているが、そのことは「教育投資と頭脳流出」という教育経済学に基づく視点からも検討・検証されるべきことが4章で展開されているからである。もちろん、評者がこれら章の特徴を改めて強調しておきたい背景には、これまで、いわゆるマイノリティの教育問題が論じられる際、日本では長らく「マイノリティは社会的に不利な立場にある存在」として固定的に描かれがちで、日本社会における社会的な位置やマイノリティ内部の階層的多様性に社会学的な検討が十分行われてこなかったという趨勢がある。とくに、評者はこれまで〈マイノリティと教育〉に対する主

要な問題設定が、とくに人権を中心とする規範的な議論によって枠づけられてきたために、マイノリティ内部の多様性を浮き彫りにする作業が十分行われにくかったことも同様の問題としてあると考えている——むろん、その「作業」によって教育を受ける権利の重要性が減じられるわけではない。肝要なのは、こうした趨勢への問題提起が本書に内包されているという前提が了解されていなければ、本書が孕む論点は、読了後、容易に規範的議論に回収されてしまうということだろう。もちろん、紙幅の関係上、限定的な章から本書を取り上げることに一定の限界が孕まれており、本書が対象化する論点の是非については、別途、批判を仰ぐ必要があるだろう。

さて、具体的に2章の内容に立ち入っていく前に「移民の子どもの教育達成」が何を意図して取り上げられるのかを明確にしておこう。筆者らの狙いは「研究上の空白を埋める試み」(44頁)と言明されているように、海外移民研究で蓄積されてきた理論枠組み——「Segmented Assimilation Theory (=分節化された同化理論)」を日本社会に適用すべく議論・考察した点に求められるとあってよい。とくに、海外移民研究を踏まえた今後の研究の方向性を〈エスニック集団間の比較〉へと枠づけようとする見解は、豊富な海外移民研究のレビューが展開されているように、従来の〈マイノリティと教育〉とは異なる論点として強調されてよい。その認識が端的に見出せるのは、これまで日本社会で展開されてきた研究の多くが「単一の要因に関心が集中しがち」であったことへの総括である(71-2頁)。ただしこのことは「移民の子どもの教育達成」に関する統計資料とその蓄積を欠いてきた日本社会—日本政府を前提とする場合、事実上、検証し難い「暗黙の領域」であったとあってよく、例外的に被差別部落の教育達成とその格差を扱った研究や、中国帰国生徒を対象とした研究者自身による膨大なフィールドワークによって、部分的に議論されるに過ぎなかった領域でもある。その意味で、筆者らが提唱しているのは、これまで「自明の前提」とされてきた量的調査に基づく研究上の困難さを繰り返し指摘したに過ぎないともいえる。

ただしそのうえで、評者は、アメリカ移民研究

の主要な知見として、既に10年以上前に提唱された「分節化された同化理論」の筆者らの吟味を通して、日本社会における今後の研究の方向性に少なからず示唆を得た。

筆者らが紹介する議論の前半を先に要約しておけば、まずそれは、アメリカにおける古典的な移民研究が提唱した「同化」理論——世代を通した言語・文化的同化による子世代の上昇移動の「約束」——が、必ずしも移民の子どもの教育達成に「結果の平等」を意味しなかったことに端を発する。ここで、日本社会を照射する上で筆者らが注目するのが、ポルテスを中心とする移民研究者がエスニック集団間の格差を説明するために提唱した理論枠組み——「分節化された同化理論」の存在である。この理論によりアメリカ社会では、盛んに移民第2世代の「成功」を占う要因として、子どもの家族構成やエスニックコミュニティ、そして移民を受け入れる編入様式がどのように関連しているかに分析の力点が置かれた。そして、主流社会での「成功」に三つの経路が存在し、そのどの経路に同化するかによって移民の子どもの教育達成に格差が生じることが示されたのである。この議論は、アメリカの〈マイノリティと教育〉研究のあり方を大きく枠づけ、三つの経路の分化を生み出す要因に大きな関心が注がれていった、と要約できる。

筆者らが展開するアメリカ移民研究の知見の整理は、今後、日本社会で展開されるべき〈マイノリティと教育〉研究の基礎的な議論・参照点として注目していただろう。そして評者は、この理論の適用可能性を丹念に批判・検討していく作業を経ることによって、今後、以下の課題が議論の俎上に載せられるべきと考えている。すなわち、世代間の社会移動を把握するための継時的な調査分析とその比較、そしてそれぞれのエスニック集団がどのような教育達成の経路をたどっているのかを、比較の視点から議論することが強く期待されているように思う。とくに比較の視点については、〈マイノリティと教育〉をエスニシティの視角ら問題としてきた研究者にとって、重要な課題になるといえるだろう。

さしあたって、筆者らは日本社会にこの理論枠組みを適用するうえで仮説的な論点を提示してい

る。それは第1に、親から子への人的資本の伝達・継承という問題であり、そこで密接に関係してくる親の日本語習得／子への日本語習得という課題である。筆者らは、子世代の教育を支える重要な資源として、親の人的資本を指摘し、その継承が子世代の上昇移動に積極的な役割を果たすと強調する。しかし英語に比して、日本語の学習機会の少なさが障壁となることにより、学習言語の獲得という課題を親世代がいかに克服していけるかが、人的資本継承のキーになるというのである。そして第2に、この課題克服のための資源動員として、エスニックコミュニティの紐帯がどのように教育達成に影響しうるかという点も、併せて重要な研究課題になるという。

その一方で、こうした理論枠組みに呼応しうるものとして、とくにオールドカマーと位置づけられる在日朝鮮人の教育がなぜ議論から取りこぼされているのかという点や、学校教育がどのようにマイノリティの教育を支えうるのかという論点に、筆者らの考察からは十分な議論が展開されていない。そこで、1990年代以降、日本社会で急速に展開されてきたニューカマーの教育研究を加味すると、評者は、オールドカマーとニューカマーの教育研究の横断・対話が追究されるべき課題と考える。この点で考えうる展望としては、まず「分節化された同化理論」に依拠して、マイノリティ間での比較という横断的な議論を展開していくことだろう。その際、両者を結びつけうる重要な分析ポイントとしては、既述の通り、1) 親の人的資本とその継承——世代間関係、2) エスニックコミュニティとの結びつき——エスニックな紐帯の動員、そして、3) ホスト社会における編入様式の分析に集約される。この点においては、すでにオールドカマーの教育研究に相当の蓄積がある。その点、評書で指摘されるように、ニューカマーの教育研究は、特定エスニシティに分析が偏っているうえ、学校教育を中心に研究が蓄積・展開されてきたこともあって、即座の比較検討は困難であるかもしれない。しかし、これまでオールドカマーとニューカマーの教育研究が分断され、個々独立に展開されてきた状況に鑑みると、〈マイノリティと教育〉研究を、「分節化された同化理論」という理論枠組みを土台に結び付け、エスニック

集団間の比較検討を可能とさせるアメリカ移民研究に学ぶことは多い。評書は考察・類推としての限界をもつとはいえ、〈マイノリティと教育〉研究が引き受けるべき課題とその方向性を提示しているという点では注目できる良書だろう。